学内提案公募型研究推進プログラム

Theme

「ものを調べる」ということ

執筆者
経済学部　教授
金丸　裕一

Profile

専門分野／東洋史、経済史、歴史神学
研究テーマ／中国電力産業史、日中戦争史、アジア神学史
主な所属学会／財団法人東洋文庫研究員、東アジア近代史学会理事、慶應義塾大学東アジア研究所所員

一昔前ならば（そしてたぶん今でも）、新聞社や出版社といえば、人文社会科学を勉強した学生にとって、ある種の憧憬と畏敬が満ち溢れた、魅力的な職場であったと思う。かく云う小生自身も、新聞記者という職業に就きたいと希望し、あれこれと調べまわった結果、あまりに過酷な勤務状況と、驚異的な入社競争率に唖然とし、こっそりと退散した記憶が鮮明である。

しかし最近、こうした職業でメシを食べている人々の仕事の中で、「はてさて？」と首を傾げることが、しばしばあるから困ったものだ。たとえば、中国関係の固有名詞の表記。

日常生活を平穏かつ幸福に過ごしている限り、決して「新聞ネタ」にならないことは当たり前だといえるが、かといって「悪いこと」ばかりを報道すると、被報道対象のイメージは劇的に低下する。中国人が主人公となった犯罪の増加とその報道過熱は、現在の日本における「中国観」悪化に一役買っていることは、間違えないだろう。しかしである。かなりの頻度で、読めない姓名の中国人が登場することには閉口させられる。

①「文＋リ」さん殺人で逮捕された②「叶」姉妹ならぬ「叶」容疑者、は、③「沈陽」出身の26歳云々カンヌン。田舎新聞ならば目を瞑るにしても、全国紙においてすらこんな記事が頻出しているから噴飯もの。①「劉」、②「葉」、③「瀋」くらい、仮に記者が中国語を学んだことがなかったにせよ、デスクでも校閲でもチェックされないのだから、「一流」会社の調査能力低下には、目を覆うべきものがあるといえるのではないか。

新聞よりも更に生命力が長い書籍においても、事態は深刻である。最近、大田尚樹『伝説の日中文化サロン上海・内山書店』（平凡社新書、2008年）という本を、タイトルに惹きつけられて購入した。比較文明論の先生が書いたようである。数ページめくっていくうちに「あれっ？」という箇所を発見。「租界内部の行政は、フランス工部局、英国工部局のような各国の租界工部局が役所を総括し、通常の事務関係から、警察、税関業務まで担当していた」(22頁)。

おいおい、「各国の租界工部局」なんて存在していないし、フランスの場合は「公董局」だろう。それに、税関業務は租界当局ではなく「海関」による管理だから上海史はヤヤコシイんではないか。李人傑が「国民党工部局に引き渡されて処刑」された（65頁）というが、なんで国民党に「工部局」があるんだろう？

碌な基礎作業もしないで本をかいてしまう人に最大の責任があることはいうまでもない。最近では「声がデカい」やつが、寡黙にして思考を重ねる学者を駆逐する傾向が強い。そんなんに騙されるだけなら兎も角、まともな事前校閲すらできない編集者がいるのかと思うと、薄ら寒くなってきた。これが、かつては『百科事典』で一世を風靡した出版社の現況なのか。

新聞社の場合も、出版社の場合も、間違えなく本社には大きいレファレンスが整備され、社員さんたちはそこで「調査作業」をしているはずだ。まさか、これを「インターネット」で済ましているわけではあるまいに……。それなのに、ちょいとかしこい大学２回生のレベルにも及ばないのは、いったい何が原因なのか。などとあれこれ考えながら、事実関係を確認するためにアクロスウイングのメディアライブラリー２階図書室に行って仰天。それでなくとも貧弱であった総記図書・工具書のコーナーで、書架６本分くらいが、就職活動・資格試験・語学検定関連の捨て本に入れ替わっていた！　最高学府であり、卑しくも「関関同立」という称号まで頂戴している場においてすら、度を越えた世俗化が進んでいるのだから、他人だけを責めてはいけないんだと、反省することしきりであった。品格や風格というコトバも、ほどなくして死語になるだろう。